

症例1の10か月後のSPECTでは大脳皮質の血流は全体に改善がみられたが、右前頭葉と両側視覚領は30 ml/100 g/minと低値のまま、上記後遺症と関連あると思われた。2例ともX線CTは正常であり、IMP-SPECTは細胞障害の程度を鋭敏に反映したものと思われ、中毒疾患での重症度や予後判定に重要な検査法と考えられる。

### 31. SEP-SPECT について

百瀬 敏光	小坂 昇	大嶽 達
渡辺 俊明	西川 潤一	飯尾 正宏
		(東大・放)
小見山高士	川原 信隆	(同・救急部)

一側正中神経刺激による誘発電位 (sensory evoked potential: SEP) をモニターしつつ I-123 IMP-SPECT を施行した。硬膜外血腫術後2例では安静時に視床は左右対称に描出されていたが、刺激時では刺激反対側の視床で同側と比較し20~30%高い集積がみられた。Kuhlの方法により脳血流量を定量した1例では反対側視床で15 ml/100 g/min 前後の血流増加がみられたが同側ではほとんど変化がなかった。また正常1例では刺激時反対側視床で58 ml/100 g/min, 同側視床で49 ml/100 g/minであった。これら3例ではSEPにおいて中心後回由来と考えられる $N_2O$ が正常に認められたが、同部位の刺激時の血流変化は明らかでなかった。SEP-SPECTは血流と電気活動の関係を知る一方法だが、IMPの挙動や刺激に対するintegrationを考慮する必要がある。